

**平成28年度「県と市町の地域づくり連携・協働協議会」(地域会議)  
1対1対談(熊野市)会議録**

**1. 対談時間**

平成28年7月8日(金)15時00分～16時00分

**2. 対談場所**

鬼ヶ城センター3階 グランデサーラ 千畳敷(熊野市木本町  
1835-7)

**3. 対談市町名**

熊野市 市長(河上 敢二)

**4. 対談項目**

- 1 広域連携による国内外からの集客拡大について
- 2 移住促進について

**5. 会議録**

**(1) あいさつ**

**知 事**

皆さん、こんにちは。本日は、大変お忙しい中、河上市長におかれましては、お時間をいただきまして、ありがとうございます。

まずは、平成23年の紀伊半島大水害から今年で5年ということで、あのときには市長にも陣頭指揮を取っていただきながら、県とも連携して復旧に向けて、また、被害を最小限にしようということで連携させていただきました。あれから5年が経ちました。皆さんのご努力で一定、復旧・復興という形になっておりますが、またいつ、同様の災害があるかもしれません。ぜひ、ともに連携をして、災害への備えを怠りなくやっていきたいと思っておりますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

それから、先般5月26日27日に行われました伊勢志摩サミットでは、熊野市の皆さんにも「クリーンアップ作戦」、「花いっぱい活動」、たくさんのご協力いただきまして、本当にありがとうございました。無事に、また、大成功という形で終えることができました。

その中でも最初の首脳ワーキングランチ、最初に来て初めて一緒に食事をしながらの会議ですが、ワーキングランチでは熊野地鶏が使われましたし、ポン酢も使われました。

さらに、配偶者の皆さんの昼食会でも熊野地鶏が使われましたし、全体、首脳のコヒーブレイク・カクテルでも、株式会社夢工房くまの「マルチ栽培みかん100%ジュース」が提供されました。

また、IMC国際メディアセンターでは、カラマンダリン、「マルチ栽

「熊野地鶏、新姫果汁なども提供されたということで、その食材の調達にもさまざまご協力いただきましてありがとうございました。特に食については、評価の高いサミットでありましたので大変よかったですと思っております。

あわせて、G7との交流を深めていこうという中で、熊野市さんにおかれましては、従来より進めておられましたイタリアのソレント市との姉妹提携が15周年というようなことで、また交流を深めていただいたと聞いております。大変ありがたいことだと思いますし、せっかくこういうG7サミットをやりましたので、全県にG7各国との交流が進んでいけばという中で、先進的に熊野市さんは取り組んでいただいておりますので、ぜひ、よろしくお願ひしたいと思ひます。

また、このサミットの後、今年8月に「国際地学オリンピック」という、今までに9回開かれていて、数学オリンピックとかの並びで、地学オリンピックというのがあるんですが、その中で野外調査が熊野地域で行われ、この鬼ヶ城にも来ることになっていひますし、木本高校のメンバーが協力をしていただくことになっていひます。私も大会実行副委員長になっていひますので、世界40カ国の高校生たちが来て地学を学ぶということでありひますので、またお世話になると思ひますが、よろしくお願ひしひます。

この地方創生の中で、きょう、インバウンドをはじめ、観光、移住というようないことで、大変重要なテーマを議論させていただきます。限られた時間ですが、よろしくお願ひしひます。

## 熊野市長

知事におかれましては、国内外を飛び回っておられる大変お忙しい中、熊野までおいでをいただきましてありがとうございます。

紀伊半島大水害のことから触れていただきましたので、それについて少し申し上げますと、ほぼ復旧事業は終えたところでございます。一部、土地の問題があつて県事業で遅れているところがありますが、これは日常生活や仕事に支障のない部分ではないかと思ひておひます。

あの時は、知事に井戸川の現場を一緒に車に乗つて見ていただきました。その後、「みえ森と緑の県民税」の導入に一役買わせていただいたのではないかと思ひておひまして、この税を活用した取り組みも市としてしっかりと今、進めさせていただひているところでございます。

それから、サミットについては、知事が今、縷々お話をいただきましたが、本当に知事を筆頭に県民会議の皆さん、県内の各市町、いろいろな事業者団体や多くの方々のお力で成功裏に終えられたことを心からお祝ひ申し上げたいと思ひますし、今おっしゃつていただいたように、熊野の産品に

についても、その使用について、大変なご配慮をいただいたところでございます。心から御礼を申し上げたいと思っております。

「国際地学オリンピック」の話でありますとか、ソレント市のことについても触れていただきました。後ほど、インバウンドについて少しお話をさせていただきますが、この鬼ヶ城センターに来られるお客さんの人数も、非常に驚くような数字が出ておまして、後で少し申し上げようと思ったのですが、この3階は、お昼は団体のお客さんの昼食会場になっておりますが、平成27年度1年間を通じて、お昼のお客さんのうちの18.3%が外国の方でございまして、そのほとんどが台湾の方ということでございます。今年の6月一カ月だけを見ると、25%という数字になっておまして、ゴールデンルート以外にも、台湾のようにリピーターのお客さんが多い国からは、こういうゴールデンルートを外れたところにも、かなりお客さんが来ているのではないかと考えています。そういう意味では、後ほど申し上げたいと思いますが、熊野市としてもインバウンド対策、国内からのお客さんの集客の取り組みはもちろんですが、そういう状況を踏まえたインバウンド対策、しっかりと進めていきたいと考えていますので、ぜひ、県におかれましては、いろいろな面で取り組みをお願いしたいと考えているところでございます。

きょうは、こういう場を設けていただきまして、ありがとうございました。

## **(2) 対談**

### **1 広域連携による国内外からの集客拡大について**

#### **熊野市長**

伊勢志摩サミットが開催されて、言うまでもなく、国内外に向けて伊勢志摩の名前が非常に大きく情報発信されたのではないかと考えています。知事も三重という言葉の頭に付ければ、もっとよかったなどおっしゃっていましたが、まさに私も三重という言葉が付けば、県の伊勢志摩地域以外の関係者にも、もっと大きな喜びになったのではないかと考えています。

いずれにしても、私はやっぱり伊勢神宮が県内では、一部のレジャー施設を除いたら、観光集客の一番の力のある地域、エリアというか、観光資源ではないかと考えていますから、伊勢志摩の情報発信がされることによって、東紀州にもたくさんのお客さんが来ていただける、そういう可能性が、今回のサミットの情報発信によって、大きくその可能性を広げたのではないかと考えています。そういう意味では、私は、サミット後、レガシーを活用するというお話もありますが、県全体として国内外からの集客の

新たなスタートだろうと思っています。

特にインバウンドについては、まだまだ不十分な対策ですが、熊野市においても、W i e F i 設備設置に対する補助でありますとか、観光資源への外国語を含めた誘導看板でありますとか、いろんな取り組みを進めているところがございますが、やはり国内的に見ても、熊野市、この言い方をすると、ほかの市町の皆さんに失礼になるかもしれませんが、熊野市だけとか、東紀州というだけでは、なかなか情報が受けとめていただけない部分があります。その意味では、やはり特に海外に向けては、三重県として情報発信を更に強固にやっていただく必要があるのではないかと思います。

先ほど言いましたように、ゴールデンルートを外れて多くのお客さんが来るようになっております。まだまだつかめている数字としては、大きな数字にはなっておりませんが、これは観光庁の数字ですと、熊野市に平成26年度で2,100人余りの外国からの宿泊客があったという数字も出ておりますし、おそらくそれはF I Tじゃないかと、個人の海外のお客さんではないかと思いますが、今後はそういうF I Tだけじゃなくて、団体のお客さんの宿泊もぜひとも伸ばしていきたいと思っています。

実は私、今週、台湾に行ってきました。非常に実務的なことだったので、オープンにはする必要もないだろうということだったのですが、メインは、東京オリンピックに向けて、台湾のナショナルチームがオリンピック出場を決めた際のキャンプ誘致ということで行って、時間がありましたので、知事も旧知のポビートラベルのタイ社長さんともお会いしてきました。お話をすると、台湾の人たちが考える観光スポットはどこがいいかというのは、我々が思うところと若干ずれがあるなというようなこともございます。そういう意味では、我々は、今回初めてそういう活動をしましたけれども、県においては、これまでも、先ほど言いましたように知事を筆頭にして、海外からの誘客に向けて様々な取り組みをされておりますので、ぜひともこのサミットを契機に、その取り組みを強化していただきたい。あわせて我々も連携をさせていただきたいと思っています。

それから、2番目の国道260号、42号、311号とリアス式海岸を生かした観光集客についてということですが、さっき言いましたように、三重県で一番情報発信力があるのは伊勢神宮だろうと。今回のサミットによって伊勢志摩の集客力は非常に高まるということで、私は常々申し上げているのですが、東紀州に来ているお客さんの数、これは大分昔の数字だと思うんですが、紀勢国道事務所の調べによると、多分、車で来る個人のお客さんの数字では、2%から3%しか回ってきていないというお話があります。やっぱり何か間をつなぐものが必要ではないかと。その間をよく見ると、

志摩のリアス式海岸は、三陸海岸と並ぶ有名なリアス式海岸ですし、熊野に近づくほど、今度は勇壮な海岸になります。そういう風光明媚な海岸を生かす取り組みをぜひとも県が主導的に進めていただきたい。

今回、「南部を巡るバイク旅促進事業」ということで、一步進めていただきましたけれども、この事業を契機に、まず広域連携の仕掛けをつくっていただきたいと思います。例えばドイツのロマンチック街道のように名前を付けて売り出すとか、いずれにしても、東紀州であれば、我々、ふだん一緒にいろんなことをやっていますので、東紀州だけでもいろんな話ができるんですが、伊勢志摩との連携となると、特に事業面でいろんなことを一緒にやるということは少ないものですから、県の指導的なお力で広域連携による取り組みをぜひとも進めていただきたいということでございます。

## 知 事

ありがとうございます。この鬼ヶ城センター、すごいことになっているんですね。6月だけで25%が外国人ですか、相当ですね。

三重県の全体のインバウンドは、平成27年の確報が先般、観光庁から出されて、平成27年トータルでは39万人ですが、対前年伸び率は、通年で全国2位に、119%の伸びになりました。これは、空港も新幹線の駅もない県としては、相当な伸びだと思います。7月以降の下半期については、伸び率全国1位という状況になっています。主な傾向としては、中国の人たちが占める割合が4割強、45%ぐらい、中国の人たちはFITも団体も両方いますけれども、次は台湾で5万3000人ぐらい、韓国が4万人ぐらい、香港、タイという順番になっています。県の宿泊客数の外国人比率というのは、まだ4%ぐらいなので、それなのに25%が外国人というのは、相当な数です。平成27年通年で18.3%が外国人というのも、県内では外国人比率の極めて高い場所なんだと、改めて数字で知らせていただきました。

そういう意味でインバウンドの中でも、特に今、市長からおっしゃっていただいた情報発信とか、発地対策ですね、向こうから来てもらう、出発してもらうための対策は、県と県内各地域が連携し、そして、三重県もほかの県と連携するというのが大事だと思います。一方で着地、来てもらったときのおもてなしとか、そういうのは、各地域でしっかりやっていただくのが一番いいのかと思っていますので、そういう意味では、市長からまさに私どもも我が意を得たりというご提案をいただいたと思っています。

先ほど市長から台湾のボビートラベルのタイ社長さんは、相当三重県のことを知っているうえで、それでも我々が伝えたいものとずれているなど市長は感じておられたように、今回、メディアツアーというのをサミット

のときに 22 回、36 カ国・地域から来てもらってやったんですけども、確かに最初、すごいスケジュールを詰め込んで、自分たちが見せたいものを山ほど盛り込んでやった結果、結果としてほとんど記事にならなかった。

一方で、事前に最低でも 10 時間ぐらい、向こうとやり取りをして、打ち合わせをしてメニューを選んだら、ほとんど記事になっていったというようなことがありますので、向こうがどういうものを求めているのかということに向こうのツアー会社とか、あるいはメディアとかそういうところを含めて、よく調査をするということも発地対策の一つだと思いますので、県としてもそういうところもしっかり力を入れていきたいと思っています。

実際にそれを踏まえて、どんなルートでということについては、とりわけ、今年度は奈良県、和歌山県と連携したビジットジャパン地方連携事業であるとか、あるいは海外旅行博への出展、旅行博の出展は行ったことない人とかは、そんなブースだけ出しても意味があるのかという人が結構いるんですが、実はそんなことはなくて、行って向こうで仮に旅行商品がそんなに売れなくても、向こうの人たちと会話することで、もっとこんなことができないのか、もっとこんな価格はできないか、東京からこういうふうにはできないか、関西国際空港からこういうふうにはできないかとか、いろんなやり取りができるので、旅行博への出展は結構意味があると私も思っていますし、そういう出展とか、あとは、関西国際空港、中部国際空港両方からの紀伊半島の旅行商品もつくっていききたいと思っていますし、中部圏の昇竜道の中で熊野古道・伊勢路を広域観光道に位置づけていますので、そういう部分もしっかりやっていききたいと思っています。

それから、体験型の滞在プログラムというか、自然体験系みたいなものも結構望まれるケースが多いですし、それをやることで、国内においてもそうですが、三重県に来ていただく観光客の傾向として、滞在時間が他県と比べてちょっと短いというような話です。チェックアウトしたらすぐ三重県を出て行ってしまうというケースがありますので、要は本来であればチェックアウトをし、例えば自然体験とかを少しやって、昼食もこちらで食べてから帰ってもらうというふうにするれば、地域にお金が落ちるのに、そこができてないというのがあると思いますので、国内外を問わず、そこは今、アソビューさんとかモンベルさんとかと連携した自然体験のものであるとか、あと、今回、「みえ食旅パスポート」というのをスタートさせますが、これはインバウンドも対応させようと思っていますし、また、食というので巡っていただいて、滞在時間や地域にお金を落とすというのを増やしてもらえればと思っています。

それから、「熊野古道伊勢路」について、県内唯一の世界遺産ですので、今年度も外国人モニターツアーとか、多言語 PR 動画、そういうものをや

っていきたいと思っていますし、英語版の熊野古道伊勢路ナビの活用などもしっかりしていきたいと思います。

今回、一つなるほどと思ったのは、今、ゴルフツーリズムというのを三重県が力を入れてやっています、この前、タイのパタヤから100人超、104人でしたか、ゴルフで津に来てもらったんですが、その104人のうち、20人はゴルフをやらなくて、家族でその間、いろんなところを回ってもらったというケースがありましたので、それは一緒に来てもらったら、旦那さんなのか奥さんなのかわかりませんが、パートナーはゴルフを2回や3回するので、その一緒に来た人たちはゴルフをやってないわけですから、いろんなところに行きやすい環境にあるので、ゴルフツーリズムとご家族用をセットにすることで、津からでもどこからでも東紀州にも来ていただくというのも、一つの新たな方法だと改めて感じまして、非常によかったなと思います。そういうところをいろいろねらいながら、団体系になります、行ってもらえればと思っています。

それから、伊勢志摩との連携で、今、リアス式海岸とか国道260号、42号、311号の話をしていただきました、まさに今回、バイク旅促進事業ということで、熊野市をはじめとした10市町と連携した形でやらせていただきますが、まず、こういうのも一つのコンテンツとしながら、ライダーにターゲットを絞ったPRもしていこうと思っていますが、いずれにしても、今、市長からもありましたとおり、こういう単にスポットをつないだりするだけじゃなくて、ライダー目線とか、あと、この6月の末に北京と天津に行って、向こうの旅行会社と意見交換をしたときに、最近、食産業の視察みたいなもののニーズが結構多いという話があったので、そういうので熊野のほうを回ってもらって、熊野市ふるさと振興公社とか行ってもらうのもいいと思いますし、食産業への関心度がすごく高いということも話がありましたので、そういう視察旅行なども東紀州に非常に向いていると思いますので、そういうのもターゲットにしながら、テーマとかストーリーを持って伊勢志摩との連携というのもしっかりやっていきたいと思います。

## 熊野市長

私は、イタリアにいたときに、ヨーロッパほとんどすべての国、個人的な旅行で回ってきましたし、当然、国内もある程度個人的な旅行で行っています。そのときにやっぱり思うのは、行ってみないとわからない。行くと、思っていたよりここは大したことないとか、むしろ、ここはすごいなとかあります。

その意味では、今回、台湾に行って旅行会社の社長さんからお話を聞いたときに、当然、今、ここに来ている昼食需要で来ている団体のお客さん

は、鬼ヶ城は見るべきところだというので来てくれています。花の窟にも寄っていただいています。台湾から来る場合、花の窟は神社ですから、伊勢神宮見ると花の窟は外れることがあると。一つのツアーで神社を二つ見ることはあまりないんだというお話がありました。

宿泊に結びつけるために、山間部のほうの丸山千枚田であるとか、瀬八丁とか、赤木城の説明をしました。一番食いつきがよかったのは丸山千枚田です。中国本土であるとか、フィリピンには、日本の千枚田とは比較にならないようなすごい千枚田がありますが、台湾には千枚田はないと。確かに熊野市にとっては、丸山千枚田は非常に貴重な観光資源になっていますが、鬼ヶ城が一番とすれば、二番か三番ぐらゐの感じになりますが、向こうの人からすると、鬼ヶ城と並ぶ非常に行ってみみたい場所だと。こういうのは行ってみないとわからない。

とりあえずは熊野市でも頑張らなきゃいけないのと、東紀州でも一緒になって頑張らしましょうと。地方創生で若干、交付金を使わせていただいて、さっき知事がおっしゃったように、旅行博にぜひとも東紀州だけでもブースを持ちたいし、可能かどうかわかりませんが、地元の5市町の私以外の首長さんにもぜひ行っていただくほうがいいんじゃないかと思っていました。そういう声掛けもさせていただきたいと思っています。

さっき言いましたように発地対策としては、県の力は非常に大きな力になっていただいている、現実にそれも感じましたし、受け皿については、それぞれの市町がしっかりとやることだと思っていますので、発地対策としていろいろな面で今後ともぜひお願いしたいと、いろいろな取り組みをお願いしたいということでございます。

リアス式海岸を生かした観光集客については、一歩進めていただきましたし、私はこの海岸線の首長さんには、いつも声は掛けておりますので、あとは県がぐっと前へ押しいただければ、進む可能性は高いと思っています。やっぱり高速道路ができて、今まで国道260号線はなかなか観光バスが走りづらいというのがありましたが、知事にも大分頑張らせていただいて、改良が進んでおりますし、今までに比べて時間がかからないと、非常に大きなチャンスになっているんじゃないかと思っておりますので、同じことになります。ぜひ、この活用についても、県の広域的な枠組みをまずつくるという意味でも、これまで以上の取り組みをお願いしたいと思います。

## 2 移住促進について

### 熊野市長

移住促進ということについては、この6月の議会におきまして、熊野市



においては、「熊野市移住定住促進基本条例」を制定させていただきました。これは議会からも提案をいただきまして、私が市長になって初めてこういう特定の分野の基本条例をつくらせていただきました。やっぱり過疎高齢化が非常に進む熊野市ですから、移住・定住については、これまで以上にしっかりと取組を進めるという意思表示をするという思いも込めて、条例を提案し、議会の議決をいただいたところでございます。この基本条例をつくったのは、三重県内では今のところ、熊野市だけだと思います。これをてこにして、他の市町と同じことをやってもどこまでやるかというところで熊野市としては力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

移住促進のためには、まず人が要するという事で、地域おこし協力隊も一人、専従で張り付けておりますし、それから、集落支援員2名を使って、今、熊野市中の空き家の調査を行っております。市街地を除いて、海岸部、山間部、ほとんど調査を終えておりまして、大体1,100軒、空き家があると。市街地が加わってくればもっと増えると思うんですが、1,100軒あって、その1,100軒のうち、4ランクに分けて、何も手を入れずにすぐ使える、ほんの少し手を入れれば使える、相当手を入れれば使える、ほとんど使えないと。要は、AとBにどれぐらいあるかということですが、使えるんですが所有者の方が荷物を置いていて、貸す意志がないというのを除いて、すぐに使える住宅は、それでも39軒ぐらい、3%余りあるわけです。市にも遊休施設がたくさんありますので、こういうものを活用して、移住・定住促進をぜひとも図っていききたいと思っています。

この点についても、情報発信力というと、県が中心になってやっていたくほうが、それぞれの市町が個別にやるよりも、圧倒的に大きな情報発信力になりますし、それと、もう一つは、今、手探りでいろんな取組をしていますが、県内でこういう取組をしたらうまくいったというような優良事例もたくさんあるのではないかと。いろいろそういうお話をする場も設けていただいているようですが、さらに、そういうそれぞれの市町の取り組みがうまくいくようなコーディネートとか、意見交換、情報共有の場なども、これまで以上にしっかりとつくっていただいて、特にこの南のほうは、熊野市に限らず、過疎高齢化が進んでいるエリアが多いと思いますので、これまでもやっていただいておりますが、これまで以上にぜひ力を入れてやっていただきたいということでございます。

## 知 事

ありがとうございます。移住につきましては、去年の4月に、東京で「ええとこやんか三重移住相談センター」というのを開設しました。1年間で

750 件、相談がありました。その中で「空き家バンク制度」とか「空き家リノベーション事業」という事業を利用して県外から来た人が 124 人ですが、それ以外にもたくさん、事業を利用せずに来てもらうのはもっとたくさんいらっしゃるんですが、事業を利用した人だけで見ましても、124 人のうち、中南勢が一番多くて 48 人で、次に東紀州が 45 人ということで、県内のブロックの中でいけば、東紀州は 2 番目に多いという状況になっています。こういう移住相談センターで情報発信を首都圏でやらせていただいた結果、NPO 法人の「ふるさと回帰支援センター」が移住希望地ランキングというのを毎年やっているんですが、今までランクインしたことのない都道府県の中で、唯一、三重県が 20 位にランクインしたということで、初年度としては一定の成果があったと思っています。

あと、もう少し分析すると、さっきの制度を利用した 124 人のうち、関東からは 34 人で、東海圏からは 35 人で、近畿圏からが 45 人なので、今年度から関西圏で月に 1 回、「大阪ふるさと暮らし情報センター」の中に移住相談デスクを開設して、関西圏の移住希望者への情報発信というのをしていきたいと思っていますし、それ以外の移住相談会とかも、首都圏と関西圏で 9 回予定していますが、熊野市さんはそういう条例も制定していただいたのもあって、全ての相談会にご参加いただく予定と聞いておりましたので、大変ご協力いただいていること、ありがたく思うところであります。ですので、情報発信をしっかり我々もしていきたいと思っています。

さらに、相談に来ている人たちを見ますと、相談の動機というのは、田舎で働きたいというのが多かったり、環境のよいところで子育てがしたいというようなのが結構多い現状になっていますので、そういう意味では、今、熊野市さんで今年度から設けていただく「熊野市子どもは宝 未来への希望基金」というのは、非常に移住という観点でも時宜を得たセットとしていい施策なのではないかと思っていますので、我々もそういうのもアピールしながら、三重県に移住したいとって相談に来る人よりも、ふわっと都市部が近い田舎がいいとか、ふわっと農業できるところがいいとか、そういう人たちが多いため、必ず聞かれることの一つが、働くことと子育て環境のことですので、そういう情報提供の中で、今、熊野市さんが例えばこういうことをやっただけしているというようなこととかも、しっかりお伝えして行って、情報発信をこれからも積極的にやっていきたいと思っています。

それから、優良事例の共有なども、毎年度、私と市町長の皆さんに集まっておいただく「県と市町の地域づくり連携協働協議会」の中に「県と市町の移住促進検討会議」を新たに設置しまして、そういう情報共有や研修などをやらせていただいております。本年度から、新たに現地へ出向いて、

移住者目線で見直す実践的な研修も計画をしておりますので、熊野市の皆さんをはじめ、ご協力を賜ればと思っておりますので、よろしくお願い致します。

### **熊野市長**

「熊野市子どもは宝 未来への希望基金」の話をしていただいたので、私から言う必要はないんですが、当然、今、知事もおっしゃっていただいたように、地元で子育てをしていただいている若い世代の夫婦に対する支援も当然ありますが、こういう、特に都会ではよくある例として、隣の区から隣の区にこれで移ってしまうみたいなのがあって、これはこの地域でやると、ちょっと問題ですが、地元の人たちに対する支援と、特に都会からの移住ということを念頭に置いて、この基金をつくらせていただきました。

思いとしては、これを言うと、あまりよくないのかもしれませんが、定年退職で来られる方よりも、できるだけ若い方々に来ていただきたい、という思いがあります。後々の医療費とか介護費用のことを考えると、そういう意味では一般的な移住の促進だけじゃなくて、熊野市で多分三重県内で一番進んでいるものとしては、地域おこし協力隊の人数が、これまでで28人おりますし、その中にはまだ現役の者も入っていますので、そういう現役の者を除いてカウントしても、定住が4組、8人いるということでございますので、こういう利用できるものは市としては何でも利用して、若い世代を中心に、決して高齢者の方を望まないということでは全然ないんですが、若い世代を中心にして移住・定住促進をしっかりと進めていきたいと思っておりますので、ぜひ、引き続いてよろしくお願ひしたいと思ひます。

### **知 事**

ありがとうございます。市長おっしゃっていただいたとおり、今の県の移住相談センターの相談の750件のうち、20代30代40代が大体500件ぐらいですので、7割弱ぐらいです。実際に30代男性、味噌や醤油など伝統的な食品の製造に携わりたい。インターンできるところがないとか、20代男性、仕事が忙しく通勤時間も長いため、子どもの顔も見られない。地方でゆっくり子育てを楽しみたい。40代男性、三重県の炭焼き職人についての特集がテレビ放映されていたので興味を持った。職人を紹介してほしいとか、こういう話を20代30代40代の人たちが相談に来ていただいておりますので、さまざまな可能性が広がると思ひますし、先ほどの子育てもそうですが、なので、ぜひ我々も、よく市町の皆さんが取り組んでいただい

ている、さっきの空き家の状況とか、各種施策も我々もよく勉強させていただいて、情報発信のときにタイムリーに届けることができるようにしていきたいと思います。

### **熊野市長**

受け皿として先ほど知事が言われたように、子育て、住む場所、もう一つが働く場所ですが、働く場所についても、熊野市としては雇用として働く場所として第一次産業でいうと、漁業については定置網の事業主のもとで働くとか、森林組合で現場の作業員で働くとかありますが、雇用の状況によって定着率という点では、少し課題がある場合もあります。そういう意味では、農業については、どちらかという雇用ではなくて、事業主として入ってくる可能性があるのも、市では漁業に対しても、森林関係に対しても、支援策は用意しておりますが、事業主でやるための農業については、更に農業公社をつくって研修の機会もつくっています。また、働く場所がないと、結局、定着しないということになりますので、熊野市では農林水産省の補助事業で40代未満で就農した人に150万円の補助がありますが、市ではそれにプラス、50万円上乗せをしています。夫婦で来る場合は75万円上乗せをすることになっていまして、しっかりと受け皿をつくっておりますが、まだ利用者は具体的には過去に1人ということで、まだ情報発信力が足りないかなと思っています。くどいようですが、そういう意味では、入口のところで情報発信について、県のお力をぜひともお願いしたいということがございます。受け皿づくりについても、こういうのがあるというのがあれば、今後ともいろんな面で情報提供なりご指導いただければ、ありがたいと思っています。

## **4 閉 会**

### **知 事**

河上市長、ありがとうございました。きょうの議題は、インバウンドで交流人口を増やそう、観光で交流人口を増やそう、それから、移住で定住人口を増やそうというようなことで、まさに今、各地域が求められている地方創生ど真ん中の議論を2つさせていただきました。その中で、県と市町のそれぞれの役割をしっかりと、はっきりさせながら連携をしていくというようなことで、有意義な対談であったと思っています。

県としても、おっしゃっていただいた、提案いただいた中身などについて、しっかりと、最大限努力をしていきたいと思っていますので、よろしく願います。

きょうは、どうもありがとうございました。